

柴田 悅子 編著 『港の明日を考える』  
神戸港埠頭研究会

—— 港湾情報システムと労働者 ——

土居 靖範

(広島商船高等専門学校)

本書は「神戸港埠頭研究会」のメンバーがその研究の成果をとりまとめたものである。はじめてこの団体の名を耳にする人も多いと思うが、神戸港で働く官公庁を中心とした港湾労働者が主要なメンバーであり、その他柴田悦子大阪市立大学教授等の学識者も入って3年ほど前より地道な研究会活動を行なってきたといわれる。

本書は戦後より最近に至る港湾の「合理化」の進展、とりわけ情報システム化の実態とその理論的解明を行ない、さらに「国民のための港湾」として港がいかにあるべきか、すなわち明日の港を展望した好書である。

今一つ本書の特色としては、港の変貌と「合理化」をじかに肌に感じ、このままでいい、何とかしなければという意識に目覚めた働く人々の手になる「現場からの報告」という点にある。

この研究会をはじめ、全国いくつかの港湾で研究会活動が行なわれているが、このことは港湾経済学の発展の上で大へん好ましいといえる。ただ従来は横浜の「港湾産業研究会」や東京の「東京港港湾問題研究会」(現在、東京港港湾研究会と改称)にみられるように、その活動の成果は論文集の発行という形でなされることが多い、各メンバーが一定の目的意識をもって体系化した本を出すということはなされてこなかったといえよう。この神戸港埠頭研究会の場合は、メンバーが小人数であることも背景にあろうが、そうした従来の研究会活動とちがって

「共同研究」としての色彩をおびているのが特色といえよう。

話は横道にそれるが、学問における共同研究の必要性は以前よりうたわれておる、とくに港湾におけるような“広い場”においては一層そうであろう。しかし、眞の意味での共同研究はきわめてむつかしいといわれており、他の学問分野でも成功した例は数少ないといわれる。その失敗する原因としては、よき指導者がいない点と、各メンバーが訓練されていないという点にあるといわれている（同研究の方法については、梅棹忠夫著『知的生産の技術』岩波新書、45～46頁共参照）。筆者は眞の意味の共同研究にたずさわることができれば、死んでも本望と思っているが、今までその機会をえず悶々とした日々を送っている次第である。学問研究の楽しさは、ゼニ・カネにかえられないと思うが、共同研究の醍醐味を味わえば一層その感を強くすることであろう。

さて、本書は7人の執筆者により次の6章より構成されている。

- I 経済のうごきと港の変ぼう
- II 港湾「近代化」にゆれる港運業——神戸港を中心
- III 港湾情報システムについて
- IV 航空貨物通関システム（N A C C S）の分析
- V 技術革新と港湾労働者
- VI 「国民のための港湾」への模索

このように本書では戦後の港湾の変ぼうを概括的にまとめた上、コンテナリゼーションにつぐ港の大技術革新として目下進展しつつある港湾情報システム化に焦点をおく、それが港運業や港湾労働者にいかなる影響を与えるかを分析している。

コンテナリゼーションは、定期船の港湾荷役労働を全面的に無くし、それと共に従来の港湾運送業を不要化せしめ、検数・通関・検量等の業務も省略化し、港全体を一大変革の渦に巻きこんでいった。コンテナリゼーションにより、港湾労働者の職域が狭まり、雇用不安が激化した。これに対し港湾労働者はさまざまな血の出るような闘争をいどみ、労働組合運動は大きくなり上がったが、しかし破

壊的な攻撃をくいとめることはできなかつたのである。

このコンテナリゼーションは、世界海運史上最高の技術革新といえるものであるが、単なる船体や荷役方式の変化だけでなく、内陸輸送をも含む国際的な物流システム化であり、物的流通に一大革新をもたらしたのだが、他方並行して大量のコンテナ処理や書類管理のためコンピュータの導入が行なわれている。コンテナリゼーションが港湾における大規模なコンピュータ導入の道を開いたことは注目されていい。

このように1960年代後半より海運会社やコンテナターミナル個々の大手港運業者といった私企業レベルのコンピュータ化が進展するのであるが、70年代後半に入つて港全体の総合的情報システム化、コンピュータ管理化がすすめられようとしており、これは港湾における「合理化」の最近のより高次の段階と位置づけられよう。

わが国においては約10年前より、神戸・横浜・名古屋の3港の各港湾管理者により相ついで「港湾情報センター」構想が出され、港湾情報システム化の研究が着手されてきた。これらは最も港湾情報システム化の進んでいるアメリカのシアトル港等を手本としてシステムを組み立てるのであるが、今ようやく完成し、各港におけるセンターの設立とシステムが部分的にせよ稼動しはじめる段階に至つた。

港湾情報システム化は、港湾に発着する船舶や出入りする貨物の情報処理にコンピュータを導入して、従来の人の海作戦による情報伝達方式にかわる機械化処理の体制づくりを目指すものである。それも港湾管理者が主体となって「港湾情報センター」を設立し、コンピュータを利用した港全体の管理と運営をはかり、「効率的」な流通を図るというもので、主に在来船、在来貨物を対象に考えられているのが特徴といえる。

港湾のコンピュータ化は、事務手続や書類の伝達を含めた「合理化」であり、コンテナ化以上に港をより無人化に近づけ、貨物と船と荷役機械の「砂漠」に化すところが大きく、その影響はすこぶる大きい。このためとくに輸出入貨物のドキュメント作成分野の業務を担当している海貨・通関業者や検数・検定業者、お

よりそこで働く港湾労働者や港に関連した官公庁で働く労働者の不安は大きく、港湾で働く者や港湾に少しでも関心を抱く者にとって港湾情報化問題は避けて通ることの出来ない課題となっている。

こうした時期に本書が刊行された意義はきわめて大きいといえる。本書で紹介されている各港湾の情報システムの概要や航空貨物すでに稼動しているN A C C S（日本航空貨物通関情報処理システム）の役割や問題点をたたき台にして、早急に情報システム化への対応を検討することが必要となろう。

ところで本書に対する注文が若干あるので次に記したい。

まず第一に、本書では各章末に用語解説の頁が2～3頁つけられており、港湾および情報に関する専門用語の主要なものを解説している。このことは読者にとって親切であるが、内容やボリュームの点で今少しの工夫がほしいという感じをうけた。

第二に各章の構成からもよみとれるが、内容的に重複が目立っており、今少し整理できるのではないかという気がした。研究会で十分討論を重ねたといつても体系的な内容の本を出すということはむずかしい面が色々あったことと思われるが、本書の重点は、副題にあるように「港湾情報システム化」にあり、Ⅲの「情報システム化」についてのスペースを十分そぞぐべきではなかったかと思われるるのである。

そうした点で、人間にとって、社会にとってコンピュータとは何か、原点にたちもっと多角的に検討するための資料として、『コンピュータ化社会と人間』(雑誌『技術と人間』の臨時増刊号)をあわせて読まれることをおすすめしたい。

それはさておき、前に述べたように、現時点で本書が刊行された意義は大きく、本書のタイトルである「港の明日を考える」ためにも広く本書がよまれるべきと思う。値段も1,200円と手頃である。

神戸港埠頭研究会では、コンピュータ問題に限らず、港湾経営、港湾財政、港湾産業、港湾労働など、今後より幅広いテーマをとりあげていこうと意欲的である(本書「はしがき」による)。今後の同会の発展をいのり、また港における共同研究の定着を期待して紹介の筆をおくことにする。

(法律文化社、1979年4月刊、四六判、214頁 定価1,200円)